

乃こも女乙早

Mokono Saotome
Presents



〜「女」の僕と生3人〜

29

イジメラレ〜「女」の僕と飼い主3人②9

早乙女もこ乃／大洋図書

タイトルロゴデザイン: 蛇川貴子





兄と
ともやくんの
話をするには

相対的に
僕という
人間について
触れなくちゃ
ならなくなるけど

みそら
れい
美空
礼

お前の自分語りを
聞くのは案外
おもしろかったから

僕も
話してみようかな

お絵かき

かけっこ

数遊びに
ミニピアノ

大人がやれと
言うことには
なんでも
従ったし

なんでも
すぐに
上手になった

25話 青い鳥を追う 前編

だけど

僕にとっては
どれも
与えられた
作業でしかなく

それどころか



人より
優れていると
いうことは

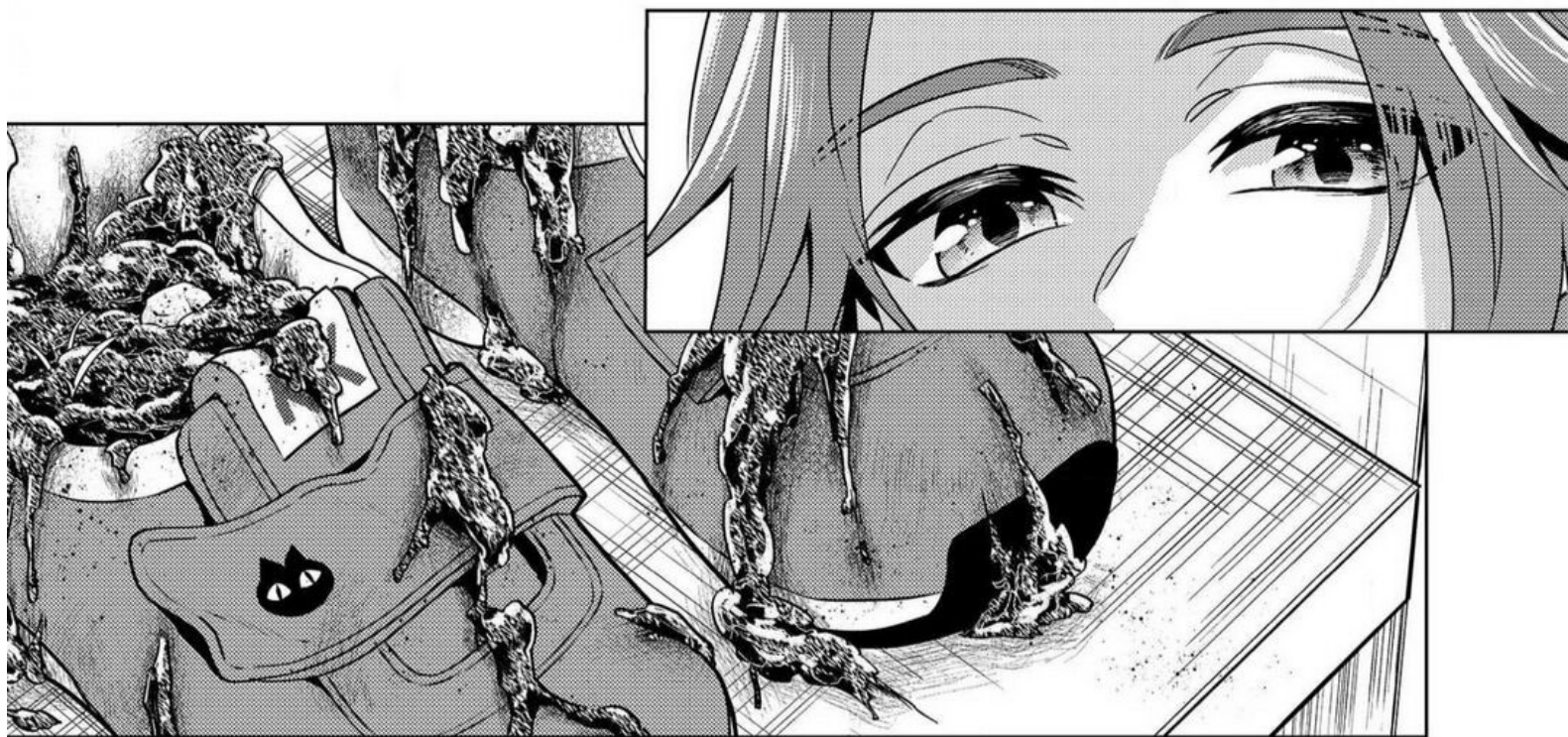
集団の中で
敵意の的になると
いうことだった



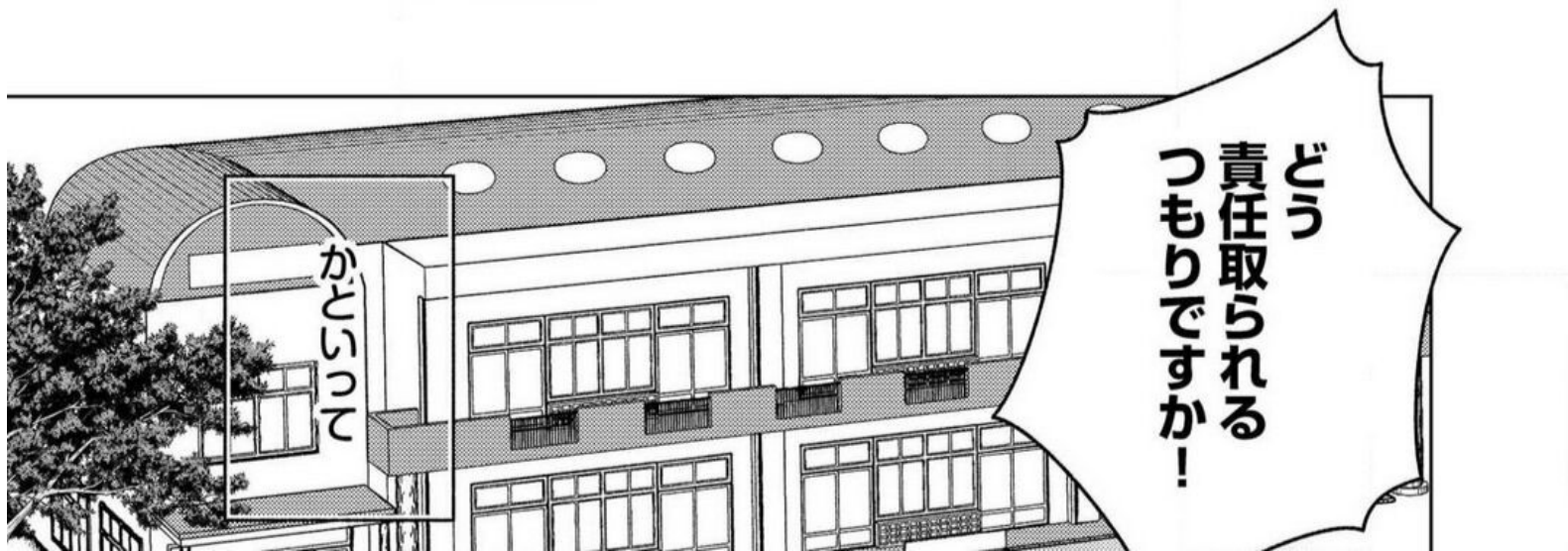
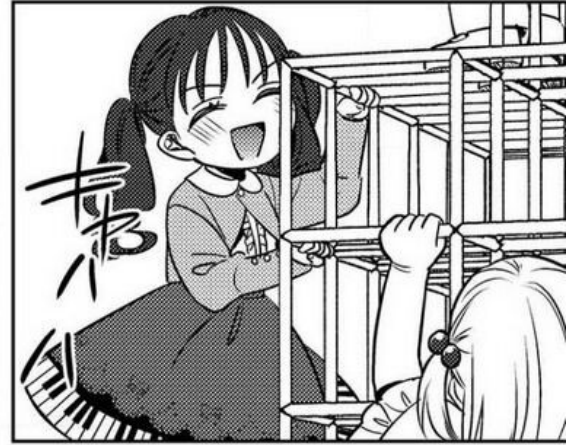
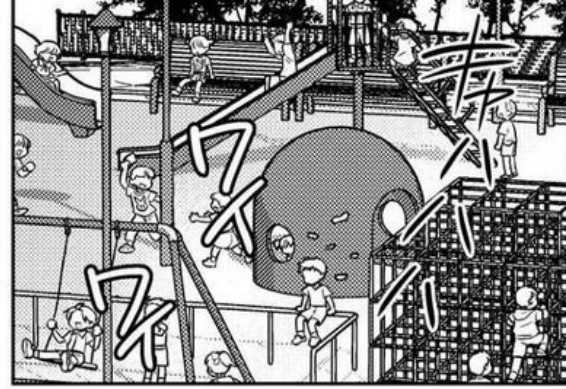
わあ

たまき
すん

もっ曲
聴かせて



.....



本当に
申し訳ござい
ません!!

なんだ

ジャングル
ジムから
落とした
くらいじゃ

人間って
いなく
ならないん
だな…

自分に
敵意を向ける者を
排斥しようと
すれば

集団の和を乱す
異物とみなされ

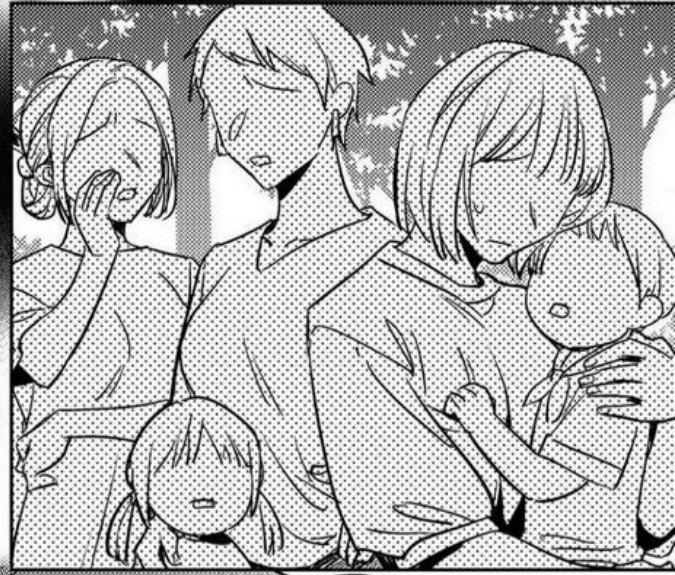
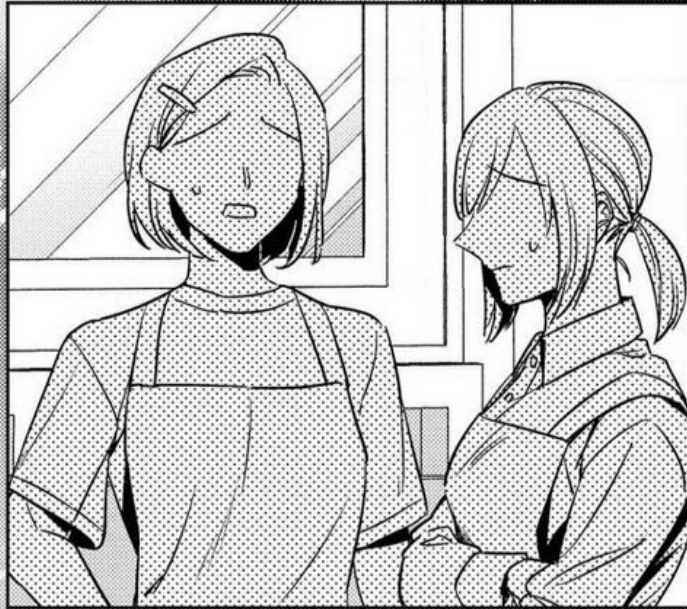
おたくの息子さん
なんでも
よくお出来になる
そうですけど

人に対しての優しさを
教えてあげることが
一番大切だと
私は思いますけどね!

仰る通り
です…!!

私が
至らないばかりに
大切な娘さんに
ケガをさせてしまい
申し訳ございません

今後
こんなことが
ないよう
よく言い
聞かせます…!!

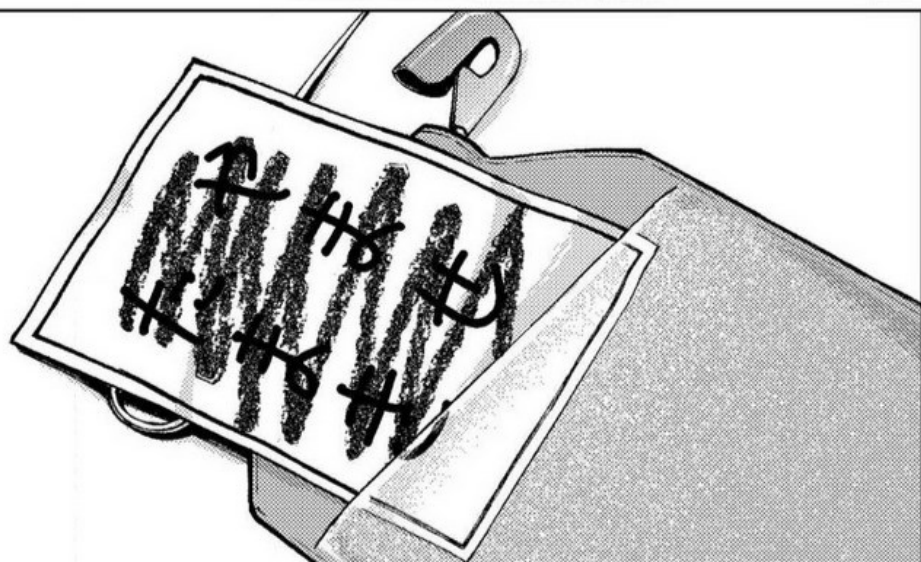




除かれるべきは

周囲の顔を
曇らせるばかりの
自分なのだと

そうそうに
わからされて
しまった



僕は
幼稚園に
行くのをやめた

他人ばかりの
集団に
居場所は
なかったけれど

家族は僕を
受け入れてくれた

図書館司書の
父は温厚で

集団行動を拒む僕を
矯正しようとせず

自分のペースで
学ぶことのできる
環境を整えてくれた

介護士の
母は快活で

興味はなくとも
教えれば
何でもこなす
僕の能力を評価し

家庭の中で
僕に役割と信頼を
与えてくれた

家で書道教室を
開いてる
祖父は理知的で

僕と
根気強く対話し

人として
どうあるべきかという
倫理観を説いてくれた

そして
2つ上の兄
凱は

少しもじっと
してられない
活発さと
直情型の性格で

しょっちゅう
ケンカして
帰ってくるくせに
いつも友だちに
囲まれていて

外部との
関わりを拒み
家族に依存する
自分と正反対の
弟のことも

邪険にせず
進んで面倒を
見てくれた

あの頃

あの時の
僕の家は



愛されるとは
どういふことか

愛情を示すには
どうしたらいいか

模範的に学べる
家庭環境だった



ほら凱
元気出せ!

次の試合には
出られるように
また頑張ったら
いいんだから!



でも...

オレ
すげー
頑張っ
て

みんなが
見てない時も
一人でいっぱい
練習してたのに

オレだけ
できないこと
いっぱい...ッ

人より
上手になるのが
遅くたって
いいじゃん!



そうやって
悔しくて
涙がいっぱい
出るくらい

なにかに
夢中になれるって

いっちばん
幸せなこと
なんだから！

すごいぞ！
自信持て！

それなら

なんにも
夢中にな
るものな
僕は

幸せには
なれない
うことだ

お母さん

クイ



僕もサッカー
習いたい



凱を
夢中にさせる
ものならば
自分も好きに
なれるかも
しれない



自分に欠けた
情熱や
執着や
競争心という
幸せになるための
パーツが
手に入るかも
しれない

ジュニアサッカー
チームでも
すぐにコツを掴み
凱より先に試合に
出るようになり

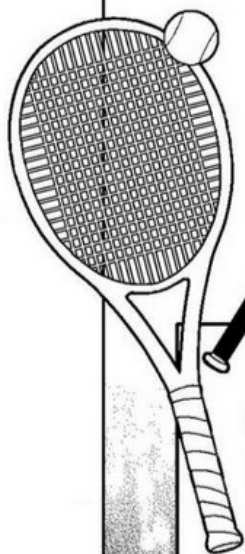
チーム内最年少で
エースになった時
飽きに限界が来て
辞めた



しばらくすると
凱は
違うスポーツに
夢中になり
僕はその度に
真似をした

水泳
野球
テニス

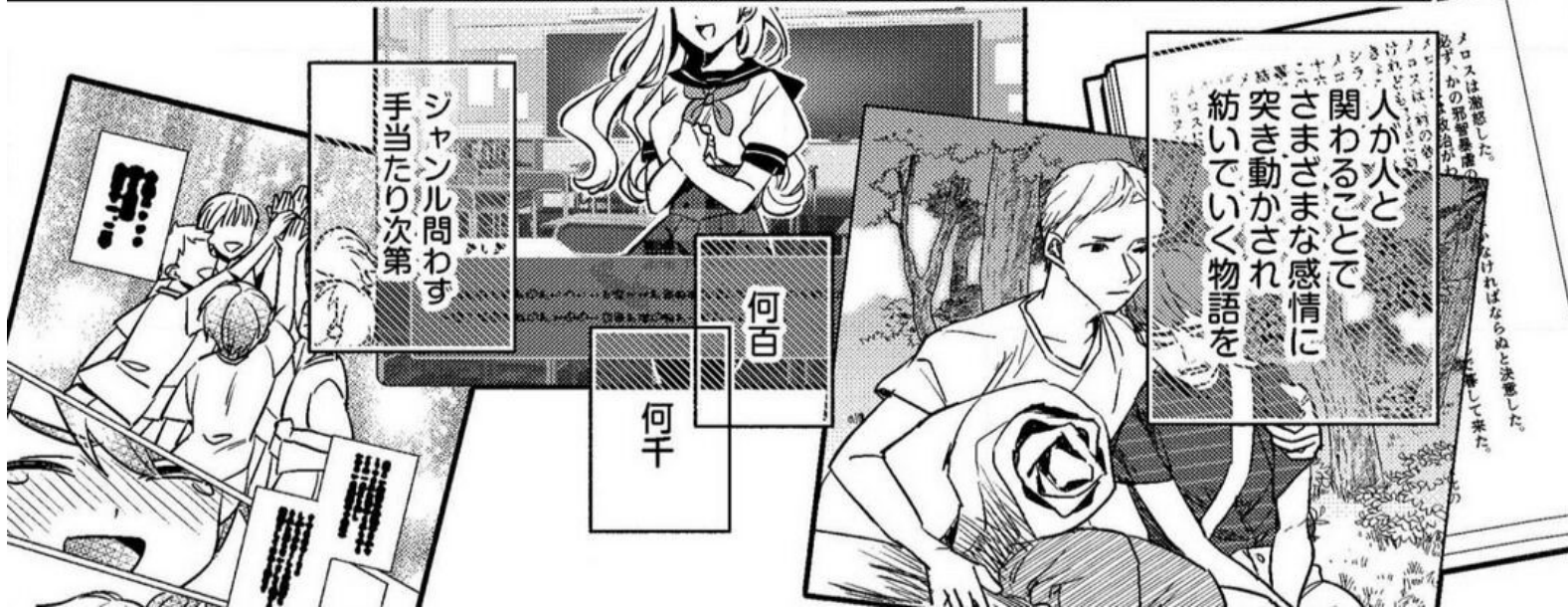
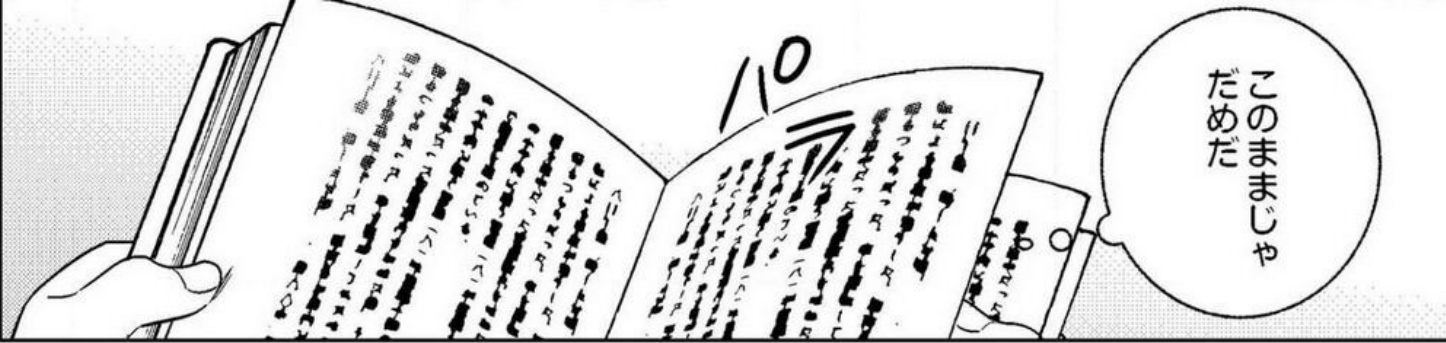
どれもこれも
退屈だったが
集団の中で
一番になるまでは
我慢してから
辞めた





悲しませた





人が通常
どんな場面で

喜び

悲しみ

怒るのか

集団生活に迎合する
データベースを
得るための

いつも通り
退屈な作業でしか
なかったけれど

ゲームだけは
違った

僕が生涯
得ることの
できないであろう
『幸せ』を

擬似的に
与えてくれる
それは

コントローラーで
自由に動かし

行動の選択を
委ねられ

▶ 助けるに決まっている！

一人のために大勢を危険に
晒すわけにはいかない

唯一の
娯楽となった

自分と一体化した
キャラクター
越しに得る
強い感情の波と
達成感

僕
今日から
学校行く

大丈夫？

無理して
ないかい？

平気

すげーじゃん
環！

じゃあ
兄ちゃんと
競走しながら
行こうぜ！

こら凱
環がこけたら
危ないだろう



平気だ

僕が僕を
操作している



そんな
つまらない
ゲームだと
思えばいい

そうして
少しずつ
摩擦を起こさず
人と関わる術を
身につけ

家族に
心配をかけずに
毎日を過ごすこと
だけを心がけた

この家が

この揺り籠
だけが

からっぽの僕の
大切なもの
だったから

山瀬
書道教室

だけど
その揺り籠を
壊したのも

家族だった

僕が
小学一年生の
終わりごろ
凱が
それまで
打ち込んでいた
バスケットボールが
出来なくなった

イップスという
心理的運動障害が
急激に悪化し

ボールを持つと
手の震えが
止まらなくな
ったからだ

凱は
思い通りに
体が動かない
いら立ちを

暴力衝動として
発散するようにな
った

チームメイト相手に
ケンカでは到底
収まらないような
傷害沙汰を
頻繁に起こし

両親は
毎日のように
相手家族に
謝って回っていた

だめだ!!

思うように
プレーできない
からと
人に暴力を
ふるう人間に

スポーツを
する資格は
ない!

嫌だ!

バスケットは
やめない!

次の
試合こそ絶対
トモが観に
来るんだよ!



あの子が
なにかに夢中になると
周りが見えなくなる
性質なのは
わかっていたけど…

まさか
対人でも
そうとはね

今後が不安で
頭が痛いな…

悲しかった

父の
怒鳴り声も

母の涙も

兄が
侮蔑の対象に
変わって
しまったことも

ともや

くん

なのに
同時に僕は

一度は封をした
好奇心が
堰を切って
あふれ出すのを
感じていた

周りが
目に入らなく
なるくらい

なにかに夢中に
なるのって
どんな気持ち
なのかな

自分の家族を
傷つけても
省みないほどの
凶暴性を含んだ
激しい執着の

終着点は
どこ
なんだろう

自滅
するの
か

相手を
追いつめて
共倒れに
なるの
か

——それとも
もしかすると

もしかして
ぜんぶぜんぶ
受け入れられて

想いの強さの分だけ
人より大きな
幸せを
手にするのかな

凱が執着する
『どもやくん』が
どんな人物か

僕は
どうしても
知りたくなった

とはいえ

名前と年齢しか
情報がない
ともやくんの
居場所を
子どもひとりの手で
探し出すのには
無理があつた

この
ともやくんて子に
手紙を
書きたいんだ

あらあゝ

かわいそうにイ

あゝこの子
知ってるわ

あの
DV旦那から
逃げてきたって
美人さんのとこの
子よ！

結局
このアパートも
見つけられ
ちゃったみたいで
一年くらいい
なくなつて

ちよつとお
聞きたいわ
その話！

厄介だな

暴力癖の父親からの
逃避が理由なら
たぶん今後も
短い間隔で
引っ越しをくり返す
さらには
離婚が
成立していたら
苗字が変わっている
可能性がある

ネットに無断で
写真を上げるのは
しちゃいけないし

どうしようかな…

手がかりが
掴めないまま
時間だけが経ち

僕が四年生に
なつたころ
観察を続けていた
凱の様子が一変した



は？

朋弥って誰

凱……

いつまで待っても
会いに来ない
ともやくんへの
いら立ちが
限界に達した
ある日

凱は
自分の心を
守るために

記憶から
彼を消去した

それから
イップスの症状も
緩和され
問題を起す
頻度が落ちつき

以前の兄に
戻ったよう
だった

凱 ねえ

こら
呼び捨て
すんな
環

兄ちゃん
だろ



僕の
好奇心だけを
置き去りに

家に
平穏が戻った



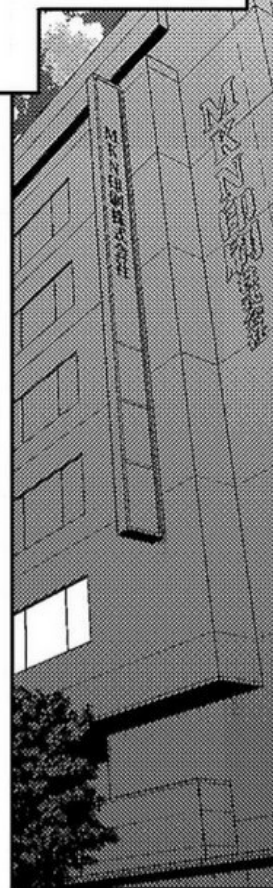
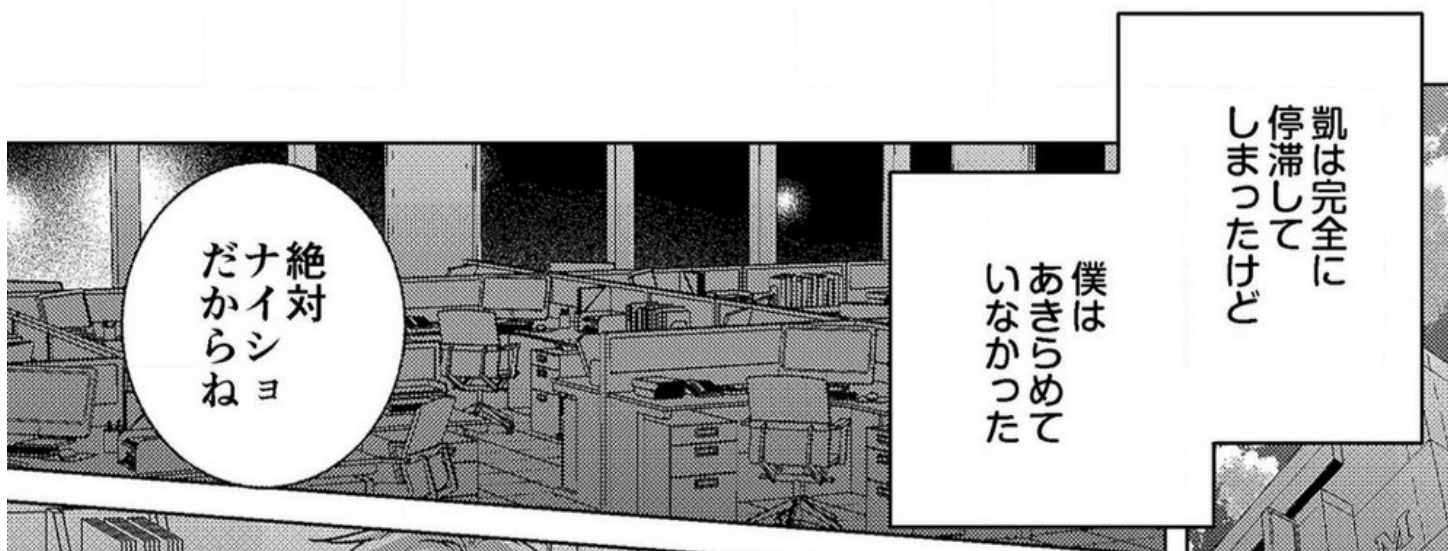
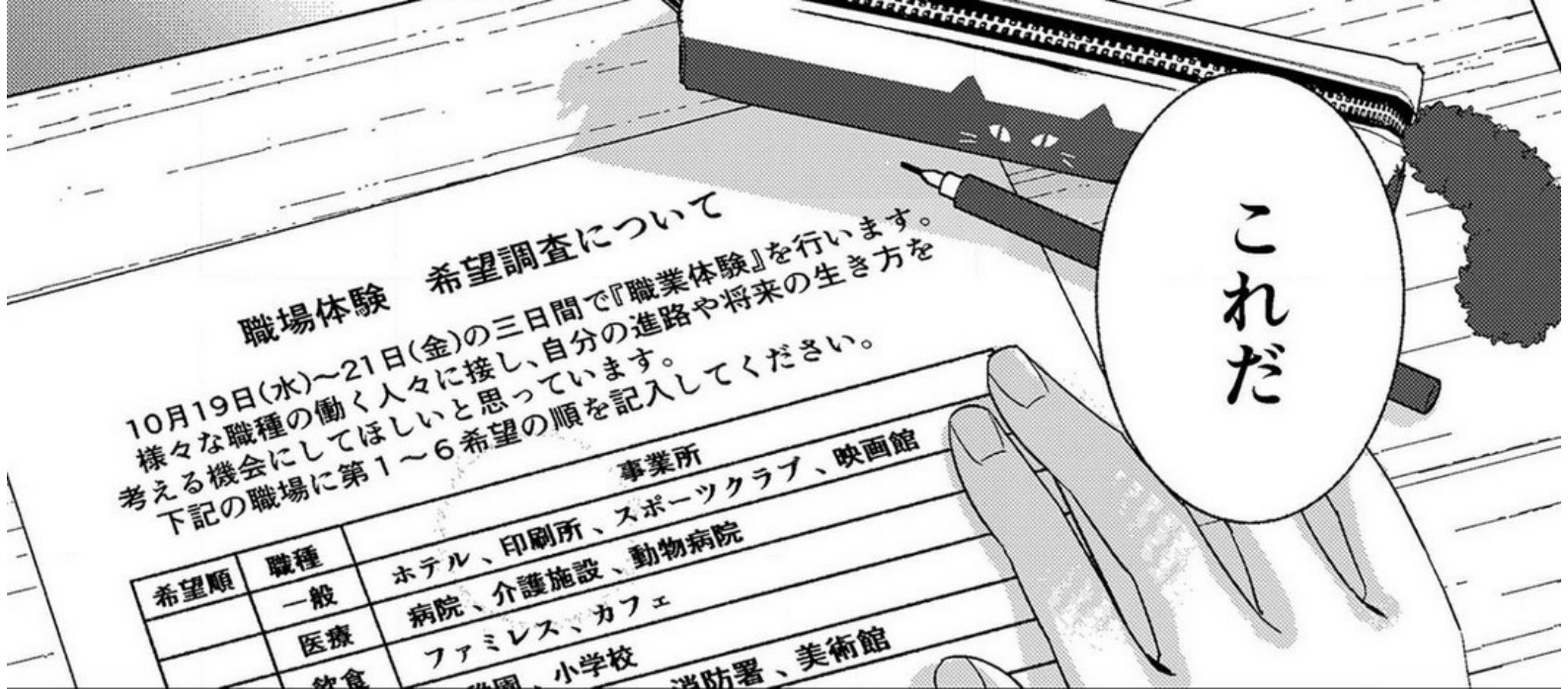
遅れたら
希望を通らないと
思ってるー

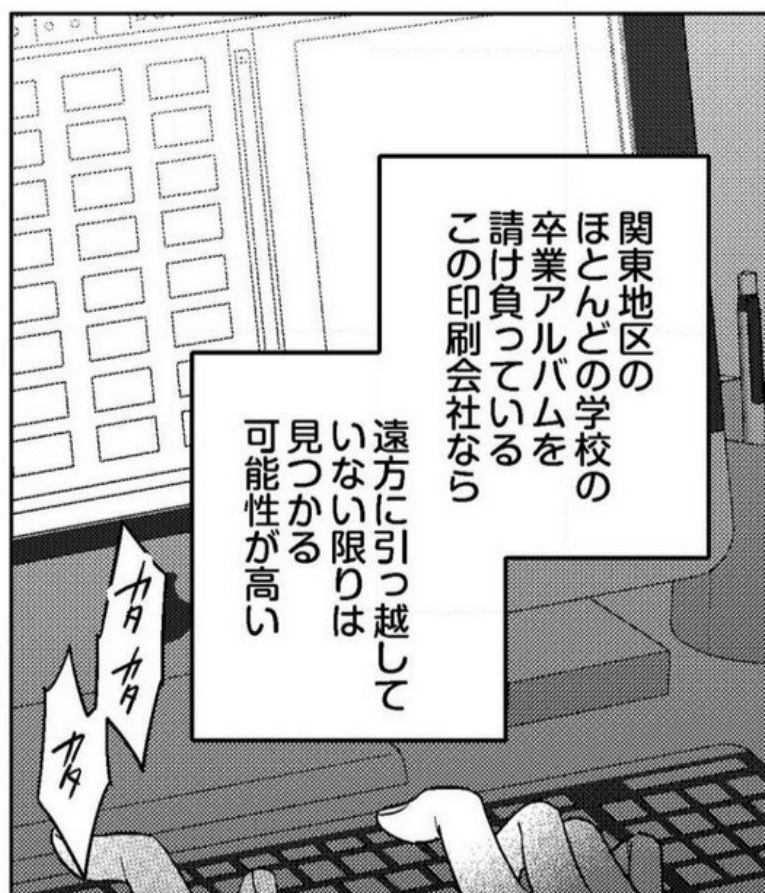
山瀬
プリント

ん…

ふー







どんなふうに
話し

笑うんだろう

人ひとりの
人生と

その家庭を
狂わせた
人物は



——いた！

この子？

やっと……
見つけた

ともやくん



乃こも女乙早

Mokono Saotome
Presents



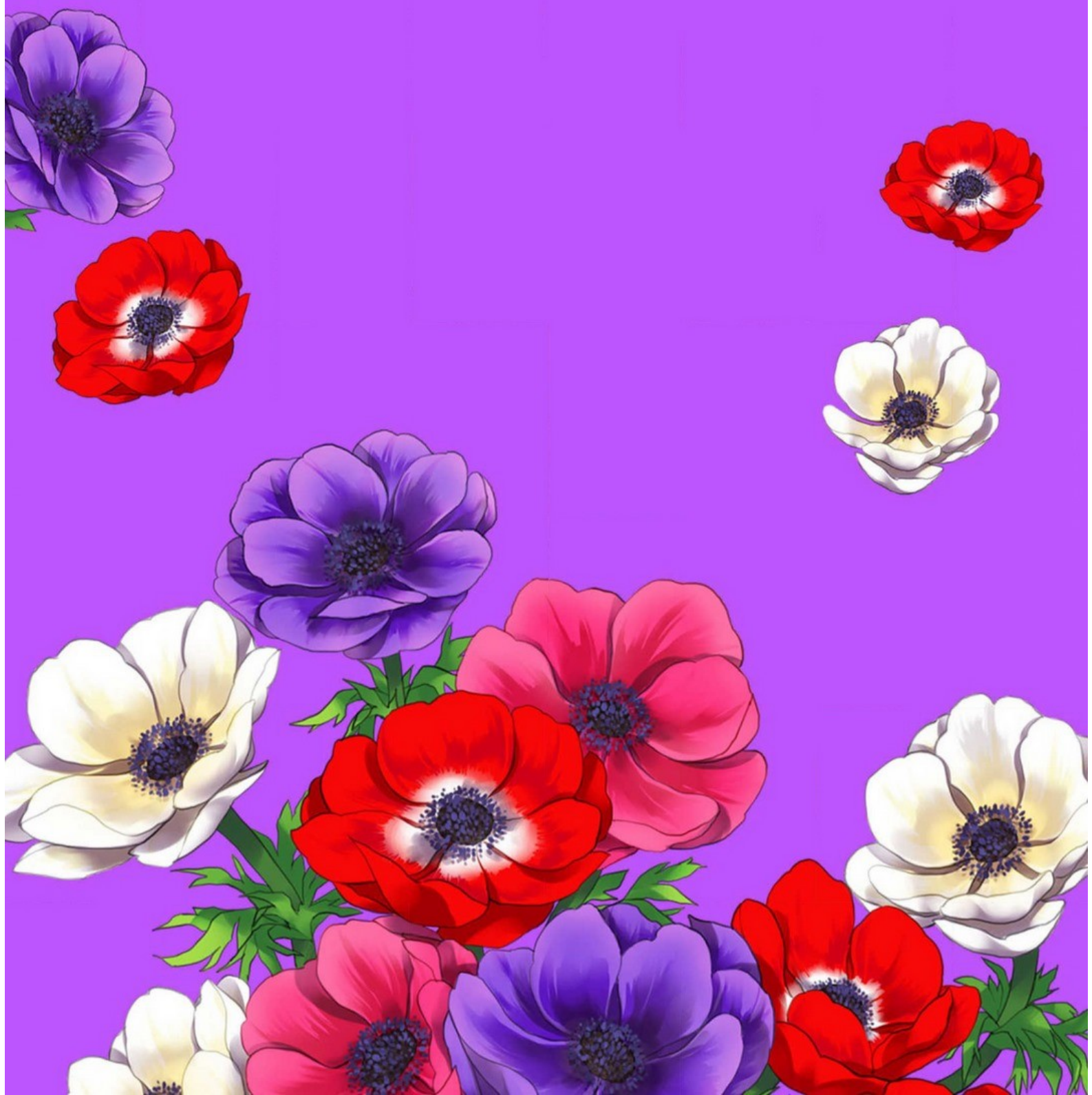
〜「女」の僕と生3人〜

30

イジメラレ〜「女」の僕と飼い主3人③⑩

早乙女もこ乃／大洋図書

タイトルロゴデザイン: 蛇川貴子





ありがとうございます
おとうさん

なにか
いいことでも
あったかい

はい
ココア
ホィッ
乗せたよ



うん

探しもの

見つかった
から



26話 青い鳥を追う中編



ようやく
ともやくんを
知ることが
喜びに胸が
躍り

ともやくんの
通う学校を
特定すること
に
成功した僕は

彼の観察を
開始した



そしてそれは
最初だけだった

花園朋弥

性格は温和

友人は多いが
誰に尋ねても
印象が薄く
漠然と良い人の
ポジション

成績は中の上

目立つことはせず
協でルールを
遵守している
優等生タイプ

母と姉との
関係は良好で
圧力があるように
見受けられないが
家事のほとんどを
担当している

帰宅部で
月に数度
友人の遊びの誘いを
受ける以外は
放課後は直帰



彼は
出来過ぎな
くらいに

良き学生であり

良き息子であり

良き弟だった

僕は
ひどく落胆した

あんな

なんか……

見てて
しんどくなる

話を
振られない限り
相槌に徹じ

他人の機嫌を
損ねないために
常に
張りついた笑みを
浮かべ

自分の存在を
消すように
背を丸めて歩く
人物の

凱は
いったいどこに
惹かれたのか



困った

ちよつと
我慢が
難しいくらい

飽きて
きちゃった…

あくまで観察で
接触はしないって
ルールで
やってはいたけど

もく
もく

ちよつとだけ…

うん

実験

このまま
観察を続けたって
どうせ

あの手の人間は
何ヶ月でも
同じ毎日を
くり返す

劇的3Pシュートで
チームを勝利に導く

山瀬

Yamase
Gai

凱

岡大樹

ちようどその時
バスケットボール誌に
凱が高校バスケットの
次期スター選手として
大きく写真が載ったと
母が喜んでいたので
思い出し

僕は
ともやくんを
試してみる
ことにした

岡第五中学

信風





あの様子だと
凱のこと
気にはいた
みたいだな



凱はSNSもしないから
とっかかりが
なかったのかも

まあ
ともやくんの立場上
直接会いに来るのは
ためらわれるだろうし



僕の投げやりな
期待とは裏腹に

それから
ともやくんの
行動力には
目を見張った



計算通りに
動いてくれたはいいけど
ここから何か
変化が起きるかと言いつ
て望み薄だろうな…

雑誌に載っていた
凱の高校の
パンフレットを
取り寄せ

足りない偏差値を
半年間
必死に勉強して
底上げし

莫大な金のかかる
私立校への編入を
姉に懇願したのだ



すごいや

ともやくん

凱の
一方通行じゃ
なかった!

ふふふっ

ふ

今まで
母子家庭の
経済状況を気遣って
お小遣いすら
断ってたのに

今の学校だって
園芸科で
将来のために
勉強してたのに

全部
凱のためなら
捨てられ
ちゃうんだね

ああ
もしかしたら…

ともやくんも
凱がキヤパ超えて
彼を記憶から
消したのと
同じ状態
だったのかも…

だとしたら

封じ込められていた
彼の執着心を
揺さぶり起こし
行動に走らせたのは

僕だ

そう思うと
ゲームをプレイ
している時に
酷似した

それでいて
その何百倍も
強い達成感に
僕は

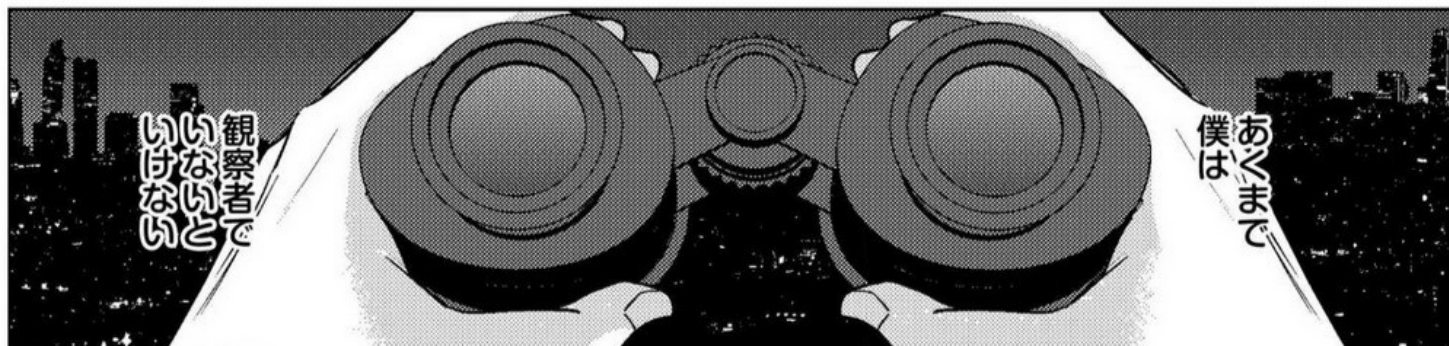
ひどく
気分が
高揚した

一瞬

彼の

ともやくんの
コントローラーを
握っているような

錯覚を覚えた









何をするにも
人一倍
要領の悪い
ともやくんの努力を
見つめてきたから

僕も
二人の再会が
自分のことのようで
嬉しかった



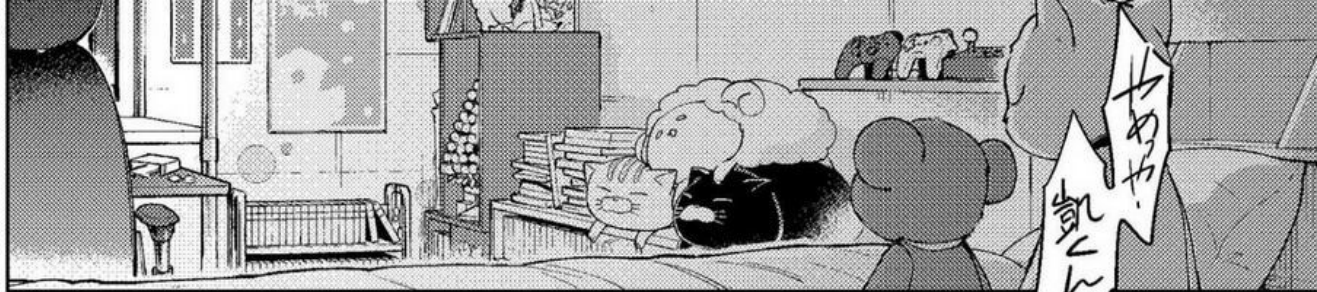
だけど





ともやくんを
待ち受けていた
学園生活は

予想のしようも
ないほどに
陰惨なものだった



頭が
理解を拒むような
理不尽なことばかりが
ともやくんの身に
降りかかり

凱に加えて
似たもの同士の
クズどもが彼を
次々と蹂躪した



無抵抗な相手に
こんなことが
できるんだ

狂ってる

狂って
いるとか
思えない

見ている
だけで
助けない

僕も



…気持ち悪い……

なのに
ともやくんは
違った

自分も含め
彼を取り巻く
全てに対する
嫌悪感という立ちで

僕は何度も
観察を
頓挫しそうになった





凱と
再会してから
彼は

以前の
覇気のなさからは
考えられないくらい
強かった



破滅に
向かおうとする
凱とは対照的に

彼は
どんなひどい環境に
身を置くこと
なっても



記憶を
失ったままに
怒りだけを
彼にぶつけ



再び得た
凱との繋がり

絶対に手放そうと
しなかった



今思えば



この頃には
すでに

凱の行き着く
先なんか
どうでもよく
なっていた
ように思う



凱ひとりなら
勝手に
自業自得で
破滅して

その辺で
のたれ死んだって
いい

だけど
ともやくんは



ともやくんの
自己犠牲を伴う
危うい執着心が

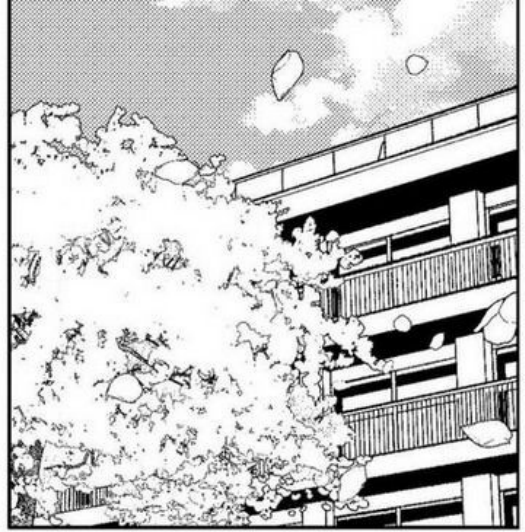
どうか彼を
壊してしま
い
ませんように

彼の想いが
報われますように

いつしか僕は
ともやくんを
見守りながら

そんなことばかり
祈るようにな
っていた





結果として

僕が
入学する前に
凱はともやくんの
ことを思い出し

二人は
和解することが
できた

ただ
ともやくんが
報われたかという
微妙なところで

追いつめられ

せめて
性愛の対象でも
すがった
ともやくんの
歪みを

正すことなく
そのまま凱が
受け入れたせいで

二人は
ただの友だちで
いられる
ラインを超えた
ようだった





皮肉なことに

暴力ではなく
求め合う形で
身体を繋げた記憶が
二人を苛み

互いに対する
想いの名前を
見失わせてしまった



この飴
私に渡させて
くださいっ…!

私どうしても
凱センパイの
特別になる
きっかけが
欲しいんです…!



というか
友だちとして以上に
好きになったなら
そう伝えればいいのに

バスケット
ともやくんのことが
頭にない凱が
今さらそれで
拒絶するわけないし

恋人に
なってしまうば
いいことじゃ
ないのかな

どうしてそんなに
友だちに
こだわるんだろう…

恋人より
良いものって
こと…?

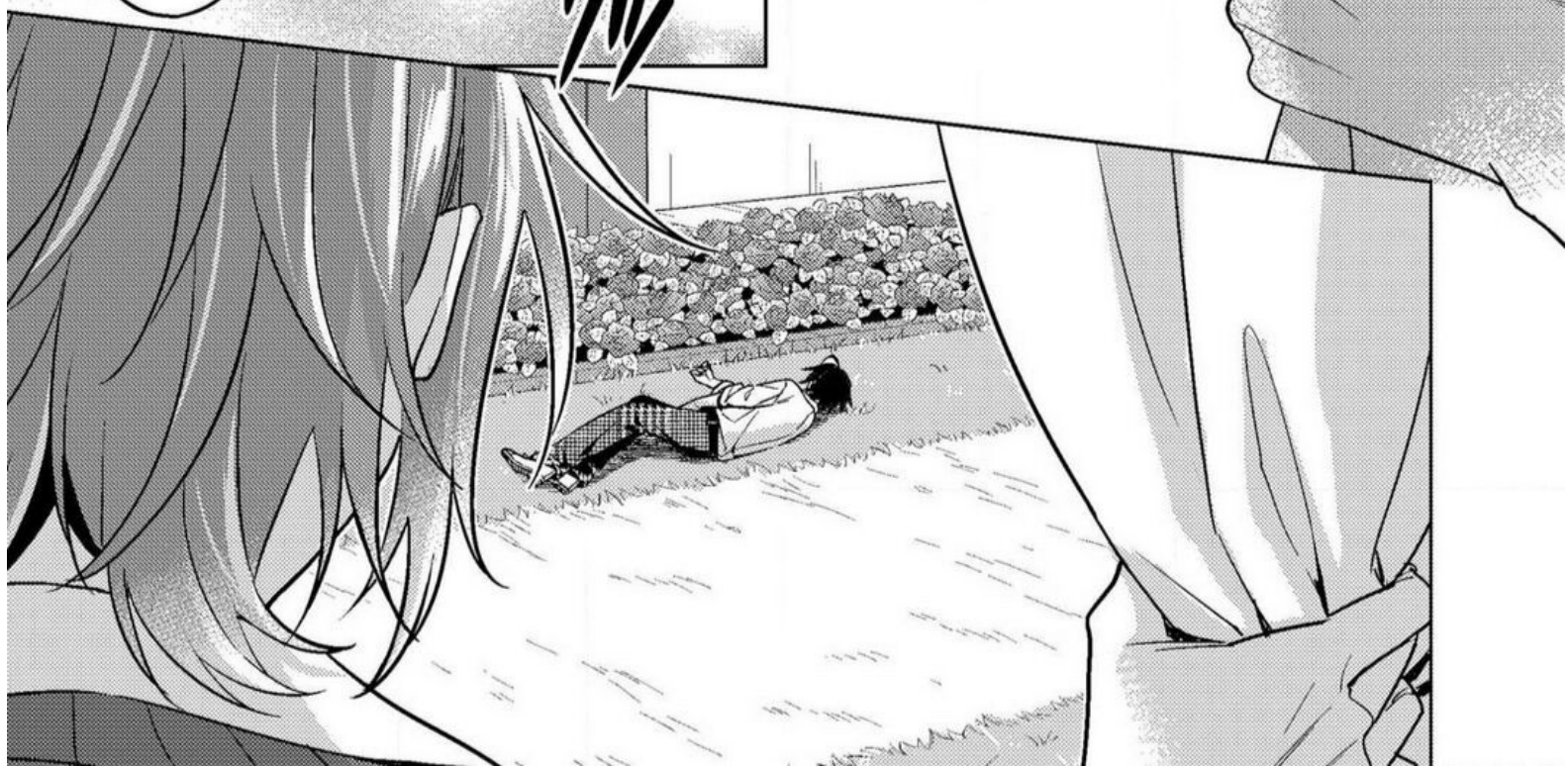
いともいふこと
ないから
わからないな

性欲に
振り回されて

ともやくんへの
気持ちに
気づけていない
だけの
凱とは違い

恋愛感情を
自覚しながらも

あくまで
『友だち』でいることに
固執する
ともやくんの歪みは
じわじわと進行し



限界に
近づいている
ようだった



とちやく……

